

交通インフラ整備で。ホテルシヤルアップと 国際観光港湾都市へ船出

「古事記」がもたらす交流・発信

宮崎県日向市では現在、「古事記編さん1300年」を記念する「ひゅうがお舟出プロジェクト」を展開している。折しも日向市で市政ルポの取材を実施させていただいた当日の10月4日午後5時、日向市役所内で「古事記編さん1300年」を記念しての神武天皇御東征の上陸の地・熊野市との交流事業についてと題する記者会見が華々しく始まった。

出席者は黒木健二・日向市長と河上敢二・熊野市長のお二人。記者会見のタイトルにもあるように、古事記に由来する伝承では、現在の三重県熊野市が後の大和朝廷創建にもつながるとされる神武東征の上陸地点とされ、日向市(美々津港)はその出発点(お舟出の地)とされている。そうした関係に加えて、両市には共に基石の最高級品である「白石」はまぐり基石(日向市)、「黒石」那智黒石(熊野

市)のそれぞれ唯一の産地であること、また黒潮に面していることなどから年間平均気温や降水量などの気候風土が似ており、かんきつ類をよく産するなどの共通点が多い。

そんな背景を持つ両市長がたまたま昨年6月、佐賀県鹿島市で開催された西日本最大の囲碁大会(全九州・祐徳本因坊戦)で同席。

「さまざまなお話をさせていただくうちに、意気投合し、古事記編さん1300年を機に、ゆくゆくは友好都市締結なども視野に入れた活発な交流事業を開始することを話し合いました」と黒木市長。

前述の記者会見はまさに最初の一步であるわけだが、日向市と熊野市との間では今年度中に次のような交流事業が予定されている。

◇「第24回 日向はまぐり基石まつり」(10月27・28日)における市長賞授与など——当日は熊野市の囲碁愛好者2名を招待/囲碁大会の成績優秀者への日向市長賞(特別賞)授与(ひむか古代粘土で制作した陶製の「お



くろきけんじ
黒木健二
日向市長

きよ丸(送) / 同じく成績優秀者への熊野市長賞(特別賞)授与(那智黒で制作したトロフィー)

◇「第4回 紀州熊野地区囲碁大会」(10月28日)における特別賞の授与——日向市長賞(特別賞・陶製「おきよ丸」を「紀州名人の部優勝者」に授与

また「ひゅうがお舟出プロジェクト」におけるその他の主要事業は次の通りだ。
◇PR事業——横断幕やのぼり旗等の設置

など

◇広報事業——「古事記編さん1300年」「日向神話伝説」など

◇おきよ祭り事業——美々津地区で毎年旧暦の8月1日に行われている「おきよ祭り」をバージョンアップ

◇観光振興事業——神武東征お舟出クルーズ(神武東征の海道コースを客船でクルーズ)600人が参加して7月15日に実施済み

※注「おきよ丸」は神武天皇が東征の折に乗ったとされる舟を昭和15年に再現したもの。風の関係で舟出が早朝に行われたため、住民たちが見送りのために「おきよ、おきよ」とみんなを起こして回ったとの伝承が由来。



古事記編さん1300年を記念しての交流事業開始・記者会見(右は河上敢二・熊野市長)

実現に向かう 海陸交通インフラの循環

日向市は「古事記編さん1300年」のほかにも、昨年4月に市制60周年を迎えるなど、大きな節目を迎えている。さらに、大きいのは、東九州自動車道の「延岡〜日向〜宮崎」間の開通だ。新たな飛躍を決定付ける重要な契機となることは間違いない。

「日向市民はもちろん、すべての宮崎県民、いや九州の太平洋側に位置する地域の住民すべての交通インフラに関する最大の願いの一つは、北九州市から大分県、宮崎県を経由して鹿児島市に至る東九州自動車道の全通でした。しかし、九州縦貫自動車道がいち早く全通した西側に比べ、東側は大分〜宮崎間が長期間にわたって断続的にしつかつながら、特

に未開通区間の多い宮崎県民は非常に不自由な思いをしてきました。全通というわけには



1時間に40個以上の処理能力を持つ強力なガントリークレーン



整備中の国際ターミナルのケーソン

いかならないもの、それでも来年度中には延岡〜日向〜宮崎間がようやくつながり、供用開始されます。延岡〜宮崎が日向市を経由して高速道路でつながるということは、日向市にとっても宮崎県にとっても、ひいては九州全体にとっても大きな経済効果が期待されます」



細島港。奥に見える水面が工業港、手前は商業港



日向市を代表する伝承芸能・ひょっとこ踊り(毎年8月に行われる「日向ひょっとこ夏祭り」にて)

商業港地区は漁港も兼ねており、魚介の水揚げのほか木材チップなどの積み下ろしが行われている。天然の良港として古来の歴史を持っているのはこの地区で、戦後いち早く整備が行われ、昭和26年度には制度が始まったばかりの重要港湾に指定されている。

そしてこの工業港と商業港に挟まれる位置にあるのが、14号岸壁(国際コンテナターミナル)や、マイナス13mの深さを持つ17号岸壁(国際ターミナル/今年3月4日に着工)などが整備されつつある白浜地区だ。

巨大ロボットのような威容を見せるガントリークレーン2号基(今年7月17日竣工)が設置された14号岸壁に立つと、対岸に17号岸壁(国際ターミナル)の順調な整備状況がほぼすべて見



牧水も釣りを楽しんだ耳川は美々津港に注ぐ清流

近未来都市像は国際観光港湾都市

今回の取材では細島港で現在進行している

折しも平成23年度は、前述のように日向市の市制60周年の節目の年だった。そこで日向市では、東九州自動車道をめぐる状況の急速な進展、細島港の再整備に関する劇的ともいふべき環境の進展という「海陸双方の基幹インフラ」の飛躍的な変化を千載一遇の好機ととらえ、新たな成長戦略として「細島港を核としたグランドデザイン」を策定するに至った。

その整備状況をつぶさに見ることができたので、概要をご紹介しておきたい。

細島港を北側から見ると、大きく「工業港地区」「白浜地区」「商業港地区」に分けられる。

工業港地区は臨海工業地帯に囲まれており、現在は主にニッケル鉱石、マンガンなどの積み下ろしが行われているほか、定期船およびクルーズ船などの発着も行われている。工業港地区は昭和39年度までに造成されたもので、日向・延岡地域が同年度に新産業都市に指定される原動力ともなった。

またマイナス13mの水深を持つ17号岸壁には大型客船なども楽に接岸できるし、外港地区の沖合には南沖防波堤(国直轄事業、全長600m)および北沖防波堤(県交付金事業、全長450m)の設置工事が行われつつあり、災害時などの物流ルート確保にも細心の工夫がなされている。



重要伝統的建造物群保存地区・美々津の静謐な町並み

【黒木市長】
 というのも、東九州全域における有数の工業都市・延岡市と県都・宮崎市が日向市を経由して結ばれるということは、日向市が有する重点港湾・細島港とも直接結ばれることを意味するからだ。

ご承知のように重点港湾は、全国103の重要港湾の中から、平成22年度にさらに43の港湾が絞り込まれ、選定された。重点港湾への指定は当該港湾にとって、今後投資面から

の「選択と集中」の対象となることが期待される。東九州側では大分港、中津港、細島港だけが重点港湾に指定されたが、細島港の場合には特に拠点性という意味での将来性が評価されたという。

「重点港湾が指定されるに当たっては、年間の取扱貨物量が基本的に600万t以上という基準がありました。その点でいえば細島港は年間500万t弱ですから、数値的には厳しい。しかし、細島港の臨海工業地帯には旭化成をはじめとする有力大企業による先端産業(化学素材、医療機器、太陽電池パネル、リチウムイオン電池の部材など)の生産拠点が数多く立地し、次世代エネルギーの集積基地として国際的にも飛躍する土壌が潜在しています。それに加えて東九州自動車道の延岡・宮崎間が近い将来、日向市経由でつながることにより、物流基地としての拠点性も飛躍的に高まることなどの将来性が認められたのだと思います(黒木市長)。

延岡・日向間の路線は、細島港が重点港湾に指定された時点ではまだ供用開始時期が明確にはなっていなかった。しかし、門川・日向間が平成22年に開通しており、延岡市との直結も時間の問題だった。そのような状況を



東九州自動車道の工事区間は既に日向市内に到達。ICの造成も終了し、完成間近

背景に、細島港が重点港湾に指定されるについては、さらに臨海工業地帯に立地する民間企業各社トップたちの連携による国への強力な後押しもあったという。

それはつまり、熾烈な国際競争を生き抜くために緻密なマーケティングを日夜実施している民間企業にとっても、東九州における細島港の位置的優位性、港湾としてのポテンシャルの高さが、自社への利益誘導という観点にとどまらず、九州全体の新たな物流窓口としての発展性を秘めているとの評価があることを意味する。さらに国がいかに細島港の将来性を認めているかは、平成23年度予算において、「細島港国際物流ターミナル整備事業」が国直轄事業として新規事業採択を受けたことでも分かる。同年度の国直轄の新規事業として国際物流ターミナル整備が認められたのは細島港だけなのだ。



創作力・鑑賞力・ディベート力が問われる「牧水・短歌甲子園」は文化系高校生の甲子園！

市長は行く先々でこの歌を引用し、「山も海も空も青く、その青が耳川などの清流や海の水にまで映っているような、そんな国が日向市です」と説明するという。さらに「まちを本当の意味で発展させるのは、経済の力だけでなく、文化的な深みがなければいけない。そういう意味で平成18年に若山牧水の生誕地でもある旧東郷町との合併を果たしたことは、いろいろな意味で意義深いものでした。換言すればそれは、黒潮文化と森林文化との合併でもありました」と語る。

水源にも近い東郷地区から流れてくる耳川



若山牧水記念文学館と若山牧水像(右)



一つ一つの工事の進捗状況を視察させていただいた後、今度は付近の丘陵地帯からその全容を遠望する機会を得たが、細島港の持つ優れた機能性は、外部からの訪問者に過ぎない取材者にも、まさによくできたパースを眺めるかのように、よく分かった。

「延岡～日向～宮崎を結ぶ東九州自動車道の開通時期が近づき、細島港の整備が進むにつれ、いくつもの新たな現象が起こり始めました。臨海工業地帯に立地する企業が、ほかの地方に持っていた生産拠点を日向市に移し

たり、まったくご縁のなかった企業から進出に向けた問い合わせが増えたり、そうした動きが非常に活発になってきたのです。

また、外国からのクルーズ船(チャーター便)が今年10月までで既に8回も寄港しています。最大のもはイタリア船籍のコスタビクタリア号という7万5000tの豪華客船で、これらは皆、工業港の方に停泊しますが、今後、さらに寄港の増えることが予測されます(黒木市長)

さらに現在、細島港を拠点に、従来取り扱われてきた釜山ルート以外の上海ルート、シンガポールルートなどの定期航路開拓が関係各方面で取り組まれているという。それが成功すれば日向市の持つ各種ポテンシャルは、国際的なスケールを帯びた「人・モノ・情報」に彩られ、より幅広く、深みの増したものとなっていくだろう。

そういう観点からも、「日向市の近未来都市像は、国際観光港湾都市を目指すべきではないか」と黒木市長はいう。

確かに観光振興は都市の持つすべての要素が総合されて、初めて成就するものだ。単に有名な観光施設があるだけでは、現代の観光の清流はやがて、神武東征の出発点である美々津港に注ぎこみ、日向灘へと達する。そのルートはまた若き日の若山牧水がしばしば散策した道でもあるが、そこは重点港湾・細島港からも程近い。

昨年の市制60周年を記念して、日向市では全国公募の「青の国若山牧水短歌大会」を発売。高校生が参加するユニークな短歌ディベートともいえるべき「牧水・短歌甲子園」とも、早くも恒例イベントとして人気を集め始めている。

美しくも豊かな海や森林(日向市は林業王国でもある)を背景に、ダイナミックな経済の動きと奥深い自然、そこから生まれる文化や人々の奥ゆかしく静謐な暮らしが混然一体となっているまち日向を表現するのに、「青の国」とはまさに言い得て妙である。

また3年前から始まった「まちづくり協議会」による新たな市民協働のまちづくりも、いかにも日向市ならではの奥ゆかしさを感じる。各地区に予算を付与(日向市は上限100万円)する地区住民による「まちづくり協議会」は各地で行われているが、日向市ではいきなり予算を分配する方式は取っていない。自分たちの地区の本当の課題が見つかった地区だけが手を挙げ、事業を実施する仕組みが自然にできている。そのため市民はまず自分たちの課題を見つめ直すことから、自発的なまちづくりへと着手することになる。

日向市内の小中学校では今年度から「無言



全9種のアミノ酸中8種を含む「へべす」。酸味が爽やかな日向市イチオシの新名産品

客は満足しない。そういう意味で、もともと美しい山河があり、海があり、そこから生まれてくる澄んだ水や豊かな食材に恵まれ、古事記にも書かれた悠久の歴史を有するという具合に、多彩なポテンシャルを持つ日向市が、さらに海外ルートも含めた海陸の交通インフラが整い、産業も健全に発展していくとなれば、まさに国際観光港湾都市にふさわしい総合力を兼ね備えることになるだろう。



日向の海・山・里の名産品が人気の道の駅

海も山も青い国・日向

黒木市長に「日向市をよその土地の方に紹介するとき、いつもどのように説明されますか?」と聞いてみたところ、即座に「樹は妙に草うるはしき青の国 日向は夏の香にかをるかな」という歌が返ってきた。

日向市(旧東郷町)に生まれ、旅の歌人として知られる若山牧水の代表作の一つだ。黒木清掃」という活動を全市的に行うようになったという。これは誰に言われるのでもなく、気付いた人が自発的に校舎を、まちをきれいにしていこうとする運動で、これもまた自発的な市民協働といえるだろう。

国際観光港湾都市を目指す日向市にとって、市民のこうした自発的な郷土愛の発露は訪れる者を感謝し、目に見えにくいけれども如実に伝わるもてなしの心、「もう一つのポテンシャル」として、いつか大きな力を発揮するのではないだろうか。

(取材・文 遠藤 隆)



漢字の「叶」に似ていることから「願いが叶う海」としてカップルに人気のクルスの海